

令和5年11月28日（火）

## マンガ家志望の若者のお話

あるマンガ家志望の若者の話です。彼が17歳のとき、短編マンガが準入選に選ばれ、担当編集者がついてくれることになり、気をよくした彼は熊本から東京に上京します。当時は、すぐトップになれると思っていたそうです。

しかし、甘くはありませんでした。作品のネーム（あらすじ）を提出しても全然通らない。連載には至りません。描いても描いてもボツになる。

「さすがに自分の力のなさに気づいて、そうすると壁がどんどん高く見えてくるわけです。1週間で19ページも面白いマンガを描き続けるなんていうのは、人間にできる技じゃない。マンガ家になるべくして生まれた人にしかできないことなんだと思うようになって、ショックでしたよ」

描いても描いてもボツになる。描いても描いてもボツになる。彼は、ついには倒れて、1週間ほど体が動かなくなったそうです。もう、マンガ家になることを諦めようとした。今からサラリーマンになれるかな、とも考えました。

でも、そのとき、当時の担当編集者が言葉をかけてくれました。「こんなに頑張って報われなかったヤツを、俺は今まで見たことがない。必ず報われる日がくる。」と。

担当の編集者が、言ってくれたこの言葉に、彼は泣きました。とことん泣きました。

とことん泣いた後、気力が湧いてきました「また頑張れるぞ」

「泣く」という文字は「涙」のさんずいに「立」ち上がると書きます。涙のあとに立ち上がり、彼が描きあげた作品が、そう、あの国民的マンガ、「ONE PIECE」（ワンピース）です。彼の名前は、尾田栄一郎さんです。

人生というシナリオには法則があります。トコトンまで頑張っても、それでも結果は出ず、「もうダメだ」と力尽きるその瞬間に、あなたの人生を一変するシーン（名場面）と出会うようになっているのです。まさに「ONE PIECE」の世界観そのものです。

人は、力尽きる寸前まで頑張ったとき、尽きることのない無限の力が湧き上がるのかも知れません。